



男性と暴力：

ドメスティック・バイオレンスとセクシャル・ハラスメントを中心に(第2回講演,家族・身体・セクシュアリティ)

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2010-06-30 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 沼崎, 一郎 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10466/10003

第2回講演

男性と暴力

— ドメスティック・バイオレンスとセクシュアル・ハラスメントを中心に —

沼崎 一郎

1 暴力とは？

暴力というと、だいたい殴る蹴るとか、ものを壊すとか、破壊的な力をはたらくことだと思われています。なぜそういう破壊がおこなわれるのかというと、例えば、こらえ切れずに怒りが爆発するという俗信があります。「堪忍袋の緒が切れる」とか、最近は、ただ「キレる」とか「プツンする」と言いますね。何かたまっていたものがパンと爆発する、あるいは張り詰めた糸が切れる。自分ではどうしようもなく、暴れている。そういうイメージですよ。しかも、メチャクチャに暴れる。暴力の暴という字は暴れるという字ですが、力が暴れている。暴力というと、意味もないのに、やっても無駄なのに、何でそんなことをするのか分からないのに暴れているというイメージがありますよね。どうしてもものを壊すんだらうとか、どうしてもそんなことをするんだらうとか。

ところがよく考えてみますと、暴力というのは爆発しないときもあるのです。同じ人がいつでもどこでも爆発するかというと、決してそうではない。あるいは周期的に、定期的に爆発するかというと、それもほんとうは違う。誰に対してでも暴力をふるうというわけでもない。実は、ほとんどの場合ターゲットが決まっている。というと、こらえ切れずに怒りが爆発して、メチャクチャに暴れているというのは、どうも違うんじゃないかと

いうことです。

よく考えてみると、暴力には、実は「意味」あるいはメッセージが込められているのです。

まず、暴力の一番重要なメッセージは、「言うことを聞け」という命令です。なぜ先生は生徒を叩くのか。なぜ夫は妻を怒鳴るのか。それは、「オレの言うことを聞け」という命令なのです。

それから、「オレに逆らうから、おまえはこういう痛い目にあうのだ」という懲罰の意味が暴力には込められています。なぜアメリカが軍隊をイラクに派遣するのか。逆らうからです。逆らったら痛い目にあうのだと思い知らせるために懲罰的に軍事行動をするわけですが、それは何も軍隊だけがすることではなくて、先生が生徒を叩く体罰もそうですし、あるいは、しつけと称する子どもの虐待もそうです。

要するに、暴力とは、第一に命令であり、次に命令に従わないことに対する懲罰なのです。暴力とは、ターゲットとなっている人をコントロールする力のことです。相手を支配するために暴力を使うわけです。

そして、暴力ほど分かりやすいコミュニケーション手段はありません。例えば、何か命令を聞いてほしいとき、言うことを聞いてほしいときに、もし相手が、「何でそんなことをしなきゃいけないんですか」と聞いたとします。口で説得するというのは、なかなかたいへんですし、面倒くさいですね。「うるせえ、黙れ。言うとおりにしろ」とポカリ叩くのは非常に簡単です。だから暴力を使うのです。命令を伝えるために言葉で説得するとか、情に訴えるとか、回りくどいことをするよりも簡単だから。しかも直接伝わるから。しかも場合によっては言語が通じなくても理解できます。いきなり拳を振り上げられたら、次に何が起きるか、意味はだいたい分かりますよね。あるいは、槍を持っているとか、銃を持っているとかというのもそうですよね。怖いから、痛いのが嫌だから、あるいは殺されないために、言うことを聞いてしまう。暴力は、簡単に使えて効果絶大です。だから暴力を使うのです。

おまけに、暴力には“ウマミ”があります。相手が怖がる、これもおいしいことです。なぜなら、相手が怖がっていると、「オレは強い」と思え

るからです。強いということは、特に男のジェンダーにとっては男らしくていいことで、自分が男らしいと実感できるわけです。

さらに、「相手が言いなりになる」というのは、たまらなくおいしい。なぜなら、「オレは偉い」と思えるからなのです。自分の思いどおりに相手が自分にサービスをしてくれる。そうすると王様気分が味わえます。教室や職場や家庭で、生徒なり部下なり妻なりが言いなりにサービスしてくれると、先生とか上司とか夫は、ずっと王様気分でいられます。そうすると自分が偉いと思える。偉い男とは、男のなかの男、要するに支配者です。支配者になれるというウマミがあるから、暴力を使う。

だから、ついつい暴力を選びたくなる。私は、暴力は「選んでいる」のだということを強調したい。爆発しているのではない。こらえ切れずに爆発するというのは100パーセント嘘だと思っています。

しかもウマミがあるので、一度そのウマミを味わってしまうと止めたくなくなるのです。これは止められなくなるのではなくて、おいしいから止めたくないのです。暴力は病気ではないので、止められなくなるわけではありません。それで暴力を選び続けることになります。

まとめると、自分より弱い相手に対して、自分が強い立場にいられるときに、相手を怖がらせて、相手を言いなりにさせて、支配という目的を達する。それが暴力です。

単にものを壊すとか苦痛を与えとかということが暴力ではなくて、相手を「怖がらせ、あやつる力」、それが暴力だというふうに私は考えています。暴力というのは、何か病気の兆候とか症状ではなくて、支配という目的を果たすために使われる手段です。しかも、それを選ぶことができるのは強い者だけです。自分が相対的に強い立場にいるときだけ、暴力というものを選べるわけです。

2 ドメスティック・バイオレンスとは？

ドメスティック・バイオレンス (DV) については、ブックレットを書いていますので、もしよかったらご覧になってください (『なぜ男は暴力

を選ぶのか — ドメスティック・バイオレンス理解の初歩』かもがわ出版、2002年)。

なぜ暴力をふるうのか。なぜ男は女に暴力をふるうのか。なぜ夫は妻に暴力をふるうのか。あるいは、なぜ恋人が自分の彼女に暴力をふるうのか。それについて間違っただ俗説というのが広まっていると思っています。

そのひとつは、私は「活火山モデル」という名前を付けているのですが、なぜ暴力をふるうのかというと、何か火山みたいなもので中にマグマがたまっていて、それは仕事のストレスだとか、昔受けた心の傷だとかいろいろ言われるわけですけど、そのマグマがだんだんたまってくる。そうすると、こらえ切れなくなって、ドカンと爆発する。爆発するとガス抜きがされて、すっとしてもとに戻るという考え方です。

しかし実はそうではない。ほんとうは、この火山にはふたが付いているのです。外では、特に自分より強い相手に対しては、ちゃんとふたをしています。マグマがどんなに上がってきても決して爆発しません。だから会社でストレスがあったら、ストレスのもとになっている上司に対して爆発すればいいのに、そういうことはしないで「はい、はい」と言うことを聞いている。家に帰ってくるまでふたをしておいて、家に帰ってきてから、ぱかっとふたを開けて妻と子どもを狙い撃ちにする。それが多いですね。

ということは、ふたの開け閉めをしているので、これはちゃんと自制心がきいているのです。自動的に噴火するのだったら、会社で噴火してもいいし、通勤途中で噴火してもいいのだけれども、そういうことは絶対ない。だから活火山モデルは間違いです。

もうひとつ「山火事モデル」というのがありまして、木の枝がこすれると火がつくように、夫婦間の軋轢とかコミュニケーション不全とか、いろいろ言うのですが、要するにカップルがこすれると、ポウッと火がつく。それが暴力になる。そういう考え方です。

だけど、これも実は違う。ほんとうは、一方はこすれないように逃げているのに、他方が追いかけて行って無理にこすっているのです。

弱い人というのは、だいたい強い人に対しては必ず気を遣います。例えば、子どもは親に気を遣います。こういうことを言うと父ちゃんは必ず暴

れると分かっていたら、そんなことは絶対に言いません。「あ、今日は不機嫌そうだな」と思ったら、こそこそ隠れてぶつからないようにします。

ところが、DV加害者は、何か決まったきっかけがあって爆発するのではなくて、例えば、毎日同じみそ汁をつくっているのに、あるとき急に爆発するわけです。「こんなしょっぱいみそ汁が飲めるか」とか言って。では薄味にすればいいかという、しばらくはよくても、今度は「こんな薄味のもの飲めるか」と怒鳴るわけです。そうすると、どうしていいか分からなくなる。

どうしていいか分からない状態に相手を追い込むというのは、暴力を使うときの鉄則です。しょっぱくしても殴られるし、甘くしても殴られると、どうしていいか分からない。どうしていいか分からなくなると、常に相手の顔色をうかがって、とにかく「はい、はい」と言って、その人の言うとおりにするしかなくなるわけです。そこが狙い目で、そういう状態に相手を追い込むために、無理に追いかけていってこするのがDVです。

だから、コミュニケーションが下手でこすれるというのも間違いです。最初に言ったように、暴力というのは、これほど手っ取り早いコミュニケーション手段はないので、「おい、お茶入れろ」と女房に言って「何で、あんたにお茶なんか入れてあげなきゃいけないんだ、私が」と言われたときに、その理由をとうとうと述べ立てて、説得して納得させるというのは非常に難しいですよ。「うるせい、黙れ。この野郎」、ポカッとやって、それでお茶を入れてもらったら楽なわけですからね。だから簡単な、便利なほうのコミュニケーション手段として暴力を選んでいるわけです。

では、それにしても、どうやって暴力をふるえるようになるかということなのですが、これは「見習いモデル」と私は呼んでいるのですけれども、ひとつは学習です。つまり、家庭で父親が母親に対して何をしているかというのを見て、男はこうするものだ、女はこうするものだというのを学習します。だからDV家庭でDVを目撃して育つと、しかもそれしか知らないと、男の子は加害者になるし、女の子は被害者になります。男の子は加害者役割を学習するし、女の子は被害者役割を学習するからです。

もちろん、そうなる決まっているわけではありません。DV家庭で育

った男の子でも、例えば、うちの親父はひどかったけれども、近所に優しいおじさんがいて、いつも優しくしてもらって、大人になったらああいう男になりたいと思っていたという人は、つまり別のモデルを見て、そのほうが良いと思って学んでいけば、こうならなくてもすむのです。

ところが、こういう機会というのは非常に少ないのです。学校へ行けば、先生が黒板をドンと叩いて、「こら、おまえら静かにしろ」と暴力を使います。テレビに出てくるウルトラマンは、怪獣が出てくれば、すぐ蹴ったり殴ったりしますからね。オレが正しいと思ったら蹴ったり殴ったりしてもいいんだということを学習するわけですね。テレビのドラマを見ていても、「愛しているから殴るんだ」みたいな男しか出てこないのです。どこでも暴力で相手を支配するというモデルばかりを学ぶわけですから、暴力が使えるようになる。

その結果、暴力を学んで、暴力を使って自分より弱い者をコントロールしてもいいのだと学んだ男が、女は暴力でコントロールされてしまってもしかたがないのだと学んで、そういう役割を学習してしまった女の人を選ぶわけですね。

すると、結婚して家族をつくとどうということになるかということ、一見外から見たら普通の家庭が、実はふたを開けると強制収容所だと。これは被害者運動とかフェミニストの人たちがずっと言っていることで、DV家庭というのは、まさに戦争捕虜強制収容所そのものだ。その中でおこなわれていることというのは拷問と同じだということを言っています。夫のほうやりたい放題の看守、女房子どもは囚人。もしもDVと同じことを捕虜収容所でやれば戦争犯罪になります。それが、家庭でやると犯罪になりません。これって、おかしくないですか。ほんとうは戦争犯罪と同じほどひどいことを自分の妻や子どもにしているのがDVなのに。

ドメスティック・バイオレンスの加害者というのは圧倒的多数が男ですが、どういう人たちなのか、何をしているのかということですね。それは、暴力によって妻と子どもに恐怖を与えて、それを妻子をコントロールする手段として使って服従と奉仕を引き出し、そして家庭を強制収容所に変えている人であるということです。

妻子の服従と奉仕という、実は、ついこのあいだまでこれは当たり前だと思われていましたよね。いまでもそう思っている人がたくさんいて、「女房、子どもはオレの言いなりになって、何でも言うことを聞くべきだ。それが結婚だ。それが家族だ」と思っている加害者がたくさんいるのです。それが夫たるもの、父たるものの当然の権利であると。女性のほうも、もしかするとそれが当然かなと思ってだまされていると、怖いから言うことを聞いてしまう。それが普通で、おかしいことだと思わないということになってしまって、それが長いあいだ続いていたからDVは問題にされなかったわけです。

ですから、DV加害者というのは「怖がらせ、あやつる力」を非常に上手に使いこなす男であり、しかも手放さずに追いかけて続けます。なんせ自分のものだと思っていますから。だから別れようとするストーカーになるし、ほんとうに別れていなくなるという殺してしまうのですね。暴力男だから、やばいと思って女の人が逃げようとする、追いかけて行って殺します。そういう事件が無数にある。

だからDV加害者というのは暴力を「選ぶ」男たちなのです。しかも、暴力が選べる理由は、妻子が自分より弱い相手だからですね。そして、お巡りさんが来たら、へいへいと言うことを聞くわけです。「私は何もしていません」とか言って。

DV加害者の特徴というのがありまして、まずソトヅラとウチヅラが違います。ソトヅラは非常にいいです。だから会社では律儀で働き者で真面目な人で、近所でも評判のいいお父さんとかです。というのは、外の人に対して暴力をふるったら自分が損をするから、絶対にそういうことはしないからです。ところが中では妻と子どもに対してはやりたい放題をする。全然違う顔を見せる。

それからウソとゴマカシが得意です。まず「やっていません」と、絶対自分がやったと認めません。それから、よくある話なのですけれども、ほんとうは自分が妻を階段から突き落としているのに、「いや、落ちそうになったので、止めようと思ったら、彼女が勝手に落ちてしまった」とか言うのですね。

それに、言い訳と責任逃れが非常に上手です。「自分は悪くない」と、人のせいにします。「会社で疲れて、ストレスでいらいらしていたのに、妻がぎゃあぎゃあ言うから、つい手が出てしまいました」とか言うと、警察官とか裁判官とかも男ですからね、そうだよなあとか思って、加害者の嘘の説明のほうに納得してしまうということがあります。

それから、コントロールが巧みです。単に殴る蹴るではなくて、まず言葉の暴力があります。相手をののしったり、おどかしたり、すごんだり、いろいろなことをします。「おまえみたいなだめなやつを女房にしてやるのは、オレしかいないんだ」とか言ってね。そうすると、それが心理的な暴力になるのですけれども、まず、ばかにされ続けていると自尊心が低下してしまって、「そうか、ほんとうに私はだめな女なのか」と思って、「だめな女で、この人にすがって生きていかなきゃいけないんだ」と思ってしまい、言うことを聞いてしまいます。それが加害者の狙い目なのです。さらに、家族とか親戚とかと付き合いをせないとか、外へ仕事に行かせないとか、うちに閉じこめるとか、要するに孤立させるのです。孤立させて、頼る男は自分しかいないという状態に追い込んでいくと相手が依存してくれるので、そうするといいようにあやつれるようになる。

また、経済的暴力というのがあります。自分の仕事をさせない。「専業主婦になれ。オレのために尽くせ」と言うのです。なぜかという、それは専業主婦になってくれたほうが、自分のほうが経済力を持てますから、金でコントロールができるということもあるし、妻が自立できないようにするということです。その上で金銭を渡さないとか。逆に、男のほうが借金をして、その借金を妻に負わせるということもあります。だから、稼がせない、あるいは自分のために無理に稼がせる、という両方の局面があるのですけれども、いずれにしても経済的にも暴力をふるいます。

それから、その上で恋愛関係のときから、さまざまな性的暴力もあります。もちろんレイプも含まれます。望まない性交を強要するというのもそうですし、逆に性的なことを一切拒否する。自分は、パートナーに対しては性関係を拒絶しておいて、買春とか浮気に走る。これはどういうことかという、「女はおまえだけじゃないぞ」というのを見せつけているので

す。「おまえの代わりの女はいくらでもいるんだ。いつでも捨ててやるぞ」という、そういう脅迫、おどしなわけです。だから浮気というのでも立派な性暴力だということです。

最後に、もちろん身体的暴力、殴る、蹴るという暴力も使います。こういった多様な暴力を組み合わせて、巧みに相手をコントロールするのです。

次に、嫉妬心と所有欲が強い。まず、「おまえはほかの男に気があるんじゃないか」と異常に嫉妬心を燃やしますし、自分の女だと思っているので、離れようとする、殺してでも自分の手元に置いておこうとするのです。ときどき無理心中というのがありますけれども、このあいだもどこかでありましたよね。あれは、べつに妻を殺してしまって後悔してとか、もはやこれまでだと思って自分も死ぬというのではありません。そうではなくて、あの世まで追いかけていくために自分も死ぬのです。死んだあともストーカーになろうとして自分も死ぬということなので、無理心中という言い方はおかしいのです。

そして、子どもを平気で犠牲にします。これは、ほんとうは深刻な問題なのですけれども、妻をコントロールする手段として子どもを虐待したり、「子どもをかわいがってほしければ、オレの言うことを聞け」とか、あるいは逆に、今度は子どもを懐柔して自分の手先にして、一緒になって妻を攻撃させて暴力をふるうとか、さまざまなことがあります。あと、離婚するというと、今度は子どもを誘拐します。仕返しをするために。

また、これはさっき言った言い訳と責任逃れのひとつなのですけれども、酒と薬物のせいにする。自分が暴力をふるうのは酒のせいだというやつですね。ところが、被害者のほうも、酒さえ飲まなければいい父ちゃんなんだけど、と思いがちなのですけれども、それは実は嘘なのです。酒を飲んだときだけ身体的暴力をふるうかもしれないけれども、酒を飲まないときにどういうことをしているかということ、それ以外の暴力を全部やっているのです。しかも、ほんとうに酒を飲んで、酒の影響で暴力をふるうのではなくて、ちょっと飲んだときに暴力をふるいます。ほんとうにぐでんぐでんに酔っぱらったら、足元がふらついて暴力なんかふるえませんが、自分が寝てしまいますから。

酒と暴力は別問題です。暴力をふるう男というのは、しばしばアルコール依存症のこともありますし、アルコール依存症の男が妻に暴力をふるっていることもけっこうあるのですけれども、一方が他方の原因というわけではありません。酒と暴力とは全く別々の2つの異なる問題なのです。酒というのは自分を酔わせるためにやるものですし、暴力というのは相手をコントロールするためにやるものですから。例えば、断酒できてアルコール依存症が治れば、妻に対する暴力も自動的に止むかといえ、決してそんなことはありません。むしろ悪化することもあります。

最後に、DV加害者はなかなか変わろうとしない。これが最大の特徴です。だから、何かカウンセリングでも受けさせてDV加害者を何とかしてくださいという希望は捨ててください。治りません。病気ではないですから。というのは、暴力を止めたら自分が損するからです。いままで暴力を使うことでいろいろなウマミを味わっていたのに、止めたらウマミがなくなるのですから、王様でいられなくなるわけですから、積極的に変わる理由は何もないのです。さらに、さっきも言ったように、当然の権利だという意識が非常に強いので、男の特権として女房がかしずいてくれて当たり前だと思っているので、自分が悪いと全然思っていないわけです。むしろ、女房に逆られる自分こそ可哀想だと、自分こそ被害者だと思っています。

ただし、別れるとか言われると、ちょっとだけ暴力を控えたりということは、すぐします。特に離婚を持ち出されると、「私もカウンセリングに通って暴力を止められるように努力するから」と言い出したりするのです。ほんとうに離婚調停のときに、「私はカウンセリングに通って暴力を治そうと努力しているのに、妻は何もしていない」とか、非難している男がいます。いるのですよ。それが社会的に立派な仕事をしている人だったりすると、裁判官も「そうか女房のほうが悪いのか」と思ってしまったりするので、困るのですけれど。だからDV加害者の再教育は難しいというか、はっきり言って無理です。

海外では、暴力をふるうDV加害者に対するプログラムというのがいろいろありますけれども、主流はフェミニストのモデルで、それはきちんと暴力に向き合わせて行動を正していくというアプローチをとっています。

しかも法律的な裏付けがあって、政府が規制してやっていますし、何よりも、罰を下したうえでのプログラムなのです。裁判になって有罪になって、刑務所に行かずに執行猶予にする条件として、保護観察をきちんとして、そのなかで毎週1回そのプログラムに通いなさいということです。再教育を受けるということは処罰の一環なのです。そうでないと意味がない。アメリカのフェミニスト・モデルの一例としてはドゥルースのモデルが有名ですけれども、それを紹介した本の翻訳が出ています（E. ペンス、M. ペイマー『暴力男性の教育プログラム — ドゥルース・モデル』誠信書房、2004年）。この本は分厚い本なので、さしあたり、私の書いた読み方案内的な書評をご覧ください（『アディクションと家族』21巻3号、2004年11月）。日本には、このような加害者再教育の体制はできていません。また、いろいろな調査を見ると、海外のプログラムも効果は上がっていないようです。

大多数のDV加害者は変わらないのだから、結婚の修復は不可能です。しかも修復という考え方は、もとはよかったということですが、それは違います。もともとだめなのです。最初から自分が暴力であやつれそうな女を探して手に入れていきますから。ほんとうは暴力の兆候というのは付き合っているときからあるのです。だけど、最初はアメをいっぱい与えますから、「最初は優しかった」というのは、当たり前なのです。相手を手に入れてから「しめしめ」というので、より露骨な暴力を使うようになるのです。暴力の兆候のチェックリストについては、私のブックレットを見てくださいね。

それから、家族の再生というのは、もっと不可能です。子どもにとってはDV加害者の父親というのは、ほとんど百害あって一利なしなので。対策としては、被害者と子どもの独立と自立しかありません。

何で家族の再生は不可能なのかという話なのですけれども、DVと児童虐待は表裏一体なのです。すべてのDVは児童虐待である。母親が父親に痛められているのを見るだけで、子どもに立派な心の傷が生じますし、自分の家族を恥ずかしく思うとかということもあります。生まれる前から、いろいろな被害があるのだけれども、さまざまな調査を見ても、妻を虐待

する夫は、子どももだいたい虐待しています。

北海道のシェルターネットワークというところが、昨年か一昨年、シェルターに逃げてきた人たちの子どもたちについて調査して、半分以上が身体的暴力が子どもに対してもあるし、精神的な暴力はもう9割以上だということを行っています。世界中の調査を見ても、だいたいそうです。それで日本の「児童虐待防止法」も、やっとDVは子どもに対する暴力だということ明記するようにはなりました。

逆に、すべての児童虐待の陰にDVがあります。子どもが虐待されているときには、その父は、ほとんどの場合妻も虐待しています。もちろん、たとえ妻を殴らなかったとしても、そんなことはだいたいあり得ないのですが、子どもに対する暴力は妻に対する暴力にもなるわけです。

特に深刻な児童虐待、子どもが重症を負ったり死にそうになるケースは、DVがつきものです。これはもう、被害者支援をやって経験上、すべてそうだと思います。

DVは、子どもたちに深刻な影響を与えています。非行少年とか犯罪少年の背景を調査すると、もうほとんどすべて100パーセントと言ってもいいぐらい、家庭にはDVと児童虐待があります。そのレベルはさまざまですけれども、DVと児童虐待が少年非行や少年犯罪を生んでいるのです。もし少年犯罪をなくしたいと思ったら、DVと児童虐待をなくさなければいけないのです。

というのは、DV加害者は父親として、子どもに悪影響しか与えないからです。まず、「オレは偉い」と権威主義的な態度で自分だけが正しいという感じで教育します。子どもの言うことなどに聞く耳を持たないし、子どもの意見も聞かない。「オレの言うことだけを聞いていればいいんだ」という態度でやる。その一方で、普段は子どもに対してさっぱり関心を払わずに、ほったらかしなのです。親の役目を果たさない。それから、母親をおとしめて、母親がきちんと子どもに対して育児をできないようにします。そして、極度に自己中心的。また、妻をあやつるために多様な暴力を組み合わせるとまったく同じやり方で、子どもを巧みにコントロールします。それから、パフォーマンスが上手でソトヅラがいいので、いいとこ

取りをします。そのくせ普段は何もしない。さらに家族を分断します。妻と子どもを分断するし、それからきょうだい同士でも、特定の子どもの犠牲にして虐待して、「こういう目にあいたくなければオレの言うことを聞け」というようなことをやります。ですから、完全に父親失格なのです。詳しくは、ランディ・バンクロフト、ジェイ・G・シルバーマン『DVにさらされる子どもたち — 加害者としての親が家族機能に及ぼす影響』（金剛出版、2004年）をご覧ください。

さらに、DV加害者というのはDVのお手本になります。それで男の子は、男は力づくで支配してもいいのだということを学習するし、女の子は、虐げられて惨めな女はしょうがないんだという、暴力を受け入れる女の子になってしまうという問題があります。

それから児童虐待のお手本にもなる。親はやりたい放題で、子どもは言いなり、それが当たり前だと子どもは学習してしまいます。子どもが親の世話をするようになってしまう「役割逆転」が起こります。父ちゃんがたばこを取り出すと、さっと灰皿を出す子どもがいるんですよ。でないと怒られて殴られますからね。そういう経験しかしていなければ、自分が親になっても、子どもの世話はせず、逆に子どもに自分の世話をさせてしまうでしょう。

だから、DV加害者の父親は、いないほうがいい。いれば、百害あって一利なし。暴力を選ぶ父親はいらない。そう私は常々言っております。子どもを絶対DV加害者の下に置かないでください。まず助け出して保護しなければいけない。これが、いま充分にできていないのです。

絶対に保護した子どもを帰さないでください。帰せば殺されます。帰した結果、殺されたというケースがいったい何回報道されたら、帰さなくなるのでしょうか。日本では、1週間に1人の子どもが親に殺されています。家族の再統合という幻想は、きっぱり捨ててください。以上が、DVの話です。

3 セクシュアル・ハラスメントとは？

セクシュアル・ハラスメントというのは、今度は職場とか学校とかで問

題になりますけれども、実はDVと構造が非常によく似ております。

私自身は、大学で多発しているセクハラに対応する被害者救済のネットワークというのを、10年前ぐらいからいろいろな人たちと一緒にやって、それで被害者支援の活動をしてきて、その結果、本を書きました（『キャンパス・セクシュアル・ハラスメント対応ガイド 改訂増補版』嵯峨野書院、2005年）。そのなかで、「環境型」とか「対価型」とかと言ってもなかなか分かりにくいので、セクハラを次の4つに分けています。

1つは性的ないじめです。卑猥なことを言うとか、相手の身体のことをあげつらう。妙な噂を流す。相手の身体に触る。要するに、言葉によるいじめや、身体的な攻撃が、性的な形をとったものです。

次に、性的おどしがあります。「オレに逆らうとおまえを性的に攻撃するぞ」、露骨に言えば、「強姦するぞ。犯すぞ」という脅迫です。

3番目に、性的ゆすり・たかり。普通、ゆすり・たかりというと金ですが、そうではなくて、性的なサービスをしろと強要するわけです。宴会で部下をホステス代わりにするとか、仕事の打ち合わせと称してホテルに誘うとか。大学教師の場合、学会に出かけると、なぜか女子学生だけが教授と同じホテルなんてケースがよくあります。部下や学生は、仕返しが怖くて断れません。それをいいことに、性的に搾取しようとするのが、このタイプのセクハラです。典型的な「対価型」セクハラになります。

最後に、性的めいわくというのは、ヌードポスターが部屋に張ってあるとか、あるいは男同士で声高に猥談しているので嫌で入れない、怖くて入れないとか。要するに、不特定多数に対する性的な公害の垂れ流しです。いわゆる「環境型」セクハラが多くがこのタイプです。

性的おどしとか、性的ゆすり・たかりは、相手を怖がらせて、性的にあやつるということですから、「怖がらせ、あやつる力」を使った支配、すなわち立派な暴力です。

性的いじめや性的めいわくも、単なる嫌がらせではありません。実は、ちゃんとメッセージが込められています。それは、「おまえはここでは歓迎されていないのだ。嫌なら出て行け!」ということです。つまり、怖がらせて追い出そうとするわけです。こうやって女を追い出して、男社会を

守る。そのためにセクハラというものがあるのですね。これが、「環境型」セクハラの真の目的です。男のほうは、一緒にセクハラすると男社会の仲間になる。女の味方なんかしたら、今度は自分がいじめられ、追い出される。だから、いじめに加わるし、そうでなくとも見てみぬふりをする。それで、なかなかセクハラはなくならないわけです。

セクハラ加害者の特徴というのは、これはさっき言ったDV加害者の特徴とまったく同じです。

まずソトヅラとウチヅラが違う。強い人にはへいこらするし、男の同僚には愛想がいいし、仕事ぶりも真面目だし。特定の部下の女性とか、自分の研究室の女子学生とかにだけ性的なことをするわけですから。

次にウソとゴマカシが得意。ほんとうは胸や腰に触っているのに、「いや、ちょっと肩に触っただけだ」と言うのです。これは決まり文句で、セクハラ加害者だと言われた人が、「いや、僕はちょっと肩に触っただけなのに」と言ったときは、ありとあらゆる触り方をしていると思ってください。

さらに被害者を非難して責任転嫁をする。言い訳と責任逃れが上手です。「彼女がセクシーな服装をしていたので、つい」とか言ってですね。じゃあ、どこでもセクシーな女を見たら触るのかといたら、そんなことはないわけですから、それは嘘なのです。あるいは、「仕事で疲れていらいらしていたので、つい触ってしまいました」とか。これ、何の言い訳にもなっていないのですけれども、男同士だと、そうだよなと思ってしまいます。

さらに、多様な暴力を使ってコントロールしている。DVのときに言ったように、言葉の暴力もありますし、心理的に孤立させて自分にだけ頼らざるをえない状況に追い込むというのもそうですし、経済的な暴力も使います。これはたかるほうもあるし、逆に今度はおごりまくるというのもあるのです。それから、身体的な暴力もあります。実際セクハラしている加害者というのは殴る、蹴る、怒鳴る、首を絞める、いくらでもやっています。最後に性的な暴力にいくのです。

嫉妬心と所有欲が強いというのも、まったく同じです。さらに周囲の人

を利用したり、周囲の人も虐待したりします。自分が悪いとは全然思っていないから、反省もしないし謝罪もしない。「オレは悪くない。何も悪いことはしていない」と言って、頑強に抵抗するところもDV加害者とまったく同じです。

セクハラも暴力ですから、「選んで」やっています。まず場所と相手を選んでいきます。場所は密室でしかしていません。外では抑制しています。もしセクシーな女性を見たら、すぐにムラムラとしてしまって手を出さずにはいられない、そういう病気があったとしますね。だったら駅前でも触らなくてはいけなし、電車の中でも触らなくてはいけなし、公園でも道ばたでも触らなければいけなし、どこでも触らなければいけなしはずでしょう。でもしませんね。したら捕まるからです。ちゃんと分かっている。

誰も見ていないところで閉じこめてやるというのがセクハラです。しかも自分より弱い人にしかしません。強い者には遠慮します。社長の娘だったら絶対手を出しません。自分の部下とか自分の学生とか、自分より弱い人、自分に逆らえない人にしかしない。これもちゃんと選んでいます。しかも、やり方も選んでいます。相手の弱みにつけ込むわけです。弱みにつけ込むというのは、例えば自分の指導を受けないと卒業できない学生。それは弱みを握っているわけです。あるいは、会社のなかで昇進させるか、させないかを定める力があるということ、それは相手のそういう昇進したいけれどもできないとかいう弱みにつけ込むことができます。

しかも、やり方がしだいにエスカレートしていきます。ちゃんと相手の反応を見ながらするのです。だから、最初はそれこそほんとに肩に手を置くぐらいなのだけれども、それでも黙っていると腰に手を回すようになりたりして、それでも黙っていると、もっといろいろなところに触るようになっていたりという感じでね。

だから、弱い、自分に逆らえないやつというのを選んでするのがセクハラなのです。しかも、やり方もちょっとやってみて、「止めてください」とか言うような女だったら、もうそれ以上しません。でなければ、もっとすごいおどかしにでるか、どちらかですけれども。

必ず弁解は、「いや、自制心がきかなかった」「つい、ムラムラしてしまった」とか、「知らずにウツカリ、慰めるつもりだった」というものです。何で慰めようと思ったら抱きつかなければいけないのかと思うのですけれども。「抱きしめてあげたい」とか、勝手に思うな。それで慰められると、何で決められるかということなのだけれども。「知らずにウツカリやってしまった」というわけですね。「こんなことで傷つくとは知らなかった」とかね。全部嘘ですね。ほんとうは分かってやっています。その証拠に、もしこの人に嫌われたらたいへんだというような相手に対して、そういうことをするかということですよ。最大限の注意を払いますよね。営業で行って、この人にもものを買ってほしいというときには、ものすごく気を遣って、決して不快な感情を抱かせないように、平身低頭やるわけでしょう。

それを、女にはしなくてもいいと思っているのです。最初から気を遣う気がない。「いや、気が付かずにやった」ということは、その人に気を遣わなくてもいいと思っていることであって、気を遣わなくてもいい、気が付かなくてもいい、手を出してもいいと思っているわけです。そう思っているから、ムラムラできるのです。ということは、相手をばかにしているということになります。オレのほうが強いし、どうせこいつはオレには逆らえないから、こういうことをしてもだいじょうぶだと思っているから、注意をしないのです。ほんとうは分かっている。

セクハラの目的は何か。それは、コントロールです。セクハラというと性的なところだけが目立つわけですが、実はこっちのほうが大事なのです。相手が性的なことまで言うことを聞くというのは、これはたまらない快感なわけです。ほかの人がやれと言ったら、嫌だと言って断るはずのことを自分に対してやってくれるというのは、そこまでオレには支配力があるという証拠になりますから。

例えば、学校の先生がなぜセクハラするのか。何か授業をやっていて、生徒がふんふんとうなずいてくれて、みんなが先生の言っていることが正しいと思ってくれたら、それだけで満足すればいいのに、大部分の人はそれで満足して終わっているのですけれども、それ以上に「もっとオレの言うことを聞け」ということなのですね。

だってほんとうに性欲を満たすことが目的なら、ほかに行くところはいくらでもあるし、しかも合法的に犯罪にならずにできることがたくさんありますよね。にもかかわらず、なぜ部下や学生に手を出すのかというのは、部下や学生というのは自分に従うべき者で、それが仕事上とか学問上とかだけではなくて性的なところまで、そこまでプライベートなところまで自分の言うことを聞くというのが、たまたまなくおいしいからやるのです。だから、動機は「あくなき支配欲」です。性欲ではなくて支配欲です。自分の支配欲を満たすために、暴力という手段を使って相手を性的にコントロールするというのがセクハラです。

ですから、セクハラ加害者という人は、相手を怖がらせることによって、それをコントロールの手段として、女性の部下とか学生の性的な服従と奉仕を引き出し、職場あるいは学校を強制収容所に変える。DV加害者は家庭を強制収容所に変えますが、セクハラ加害者は職場や学校を強制収容所に変えます。逃れられない状態で虐待されるというのがセクハラですから。

あるいは、性的いじめや性的めいわくなど、怖がらせて追い出すほうは、恐怖を与えて、それを追い出すための手段にして、女を追放して、職場あるいは学校を男だけで独占する。男だけの世界を守るため、本来女はこんなところにはいけないということを、思い知らせるためにやるのがセクハラなのです。

4 暴力が造る <男性中心> 社会

DVとセクハラの話をしてきましたけれども、私は、それは暴力を使って男中心の社会を造っているのだと思います。暴力というと壊すというイメージがありますよね。ものを破壊するとか。そうではないのです。暴力というのは関係をつくるのです。社会関係をつくるための有効な手段のひとつが暴力なのです。

「怖がらせ、あやつる」ことが暴力ですから、それは支配と服従の関係を作り出すのです。そういうふうを考えて、暴力でできている関係というのはどこにあるのかということを見ていくと、DV家庭のなかもそうだし、

もしDV家庭でないにしても、私も含めて男が妻と子どもに対して、例えば不機嫌になってみせるということが出来る。不機嫌になるというのは立派な暴力です。父ちゃんが不機嫌になると困りますから。だって、まず家庭の雰囲気壊れるでしょう。和やかでなくなるでしょう。ぎすぎすしてくるでしょう。嫌でしょう、そういうのは。温かくほんわかしたところであってほしいでしょう、家庭というのはね。そこで、不機嫌になってみせると、妻や子どもが気を遣ってくれます。何とか機嫌を直してと、あれこれやってくれますよね。それが狙い目なわけですよ。あるいは恋人同士の関係でも「彼が不機嫌になるので、つついセックスに応じてしまう」と女の子がよく言うのですけれども、それも立派な暴力なのです。

暴力がつくっている関係というのがあるのです。DVというのは、そうやって暴力を使って家庭を強制収容所につくるのです。DV夫が所長で看守、妻子が囚人。そういう関係をつくってしまう。それが夫婦とか親子に見えるから、それが強制収容所の看守と囚人の関係だということが分からなくなってしまう。それが恐ろしいのですが。夫だ、妻だということを忘れて、ただ単純に、ある1人の人間が暴力をふるって、別の人間をどこかに閉じこめて、無理やり言いなりにさせているといたら、それは悪いなと誰でも思うでしょう。それが妻、夫、子ども、親とかと言われた途端に悪いと思えなくなってしまう。そこが恐ろしいところです。

同じようにセクハラというのは、職場や学校をDV家庭のようなところにしてしまうわけです。男が暴力を使って女性をコントロールするわけです。上司とか教師というのが、言ってみればDV男や虐待親父と同じ立場で、すなわち強制収容所の所長で看守で、部下とか生徒が妻子と同じように囚人になる。

すると、家にいても、学校に行っても、職場に行っても、女性と子どもはどこでも囚人なわけです。そういう家庭が日本に200万世帯あります。この数字がどこから出てくるかというと、数年前にいまの総務省、前の総理府が初めてDVの全国的な実態調査をやって、そのときに、「命の危険を感じるほどの暴力を夫から受けたことがある」と答えた人が4.5人に1人いた。それを日本の世帯数で計算すると180万から200万世帯になるのです。

もうちょっと分かりやすく言うと、小学校とか中学校で40人学級があったとすると、そのなかの1家庭か2家庭はDV家庭だということなのです。しかも深刻な。

そう考えると、思い当たる節がありませんか。そういえば、どこのクラスにも何か問題行動を起こしたり、いじめられている子どもがいるよなど。おそらく、その子の家庭はDVと児童虐待です。ということ、もし学校の先生がいらっしゃったら、ぜひ念頭に置いて対応してください。200万人が強制収容所に入っているのです。子どもの数を入れたら、もっとになります。それは、すごいことだと思いませんか。アメリカ軍がイラクでつくっている強制収容所に200万人も入っていませんよ。

毎年100人の妻が夫に殺されています。日本の殺人事件の15パーセントはDV殺人です。さらに、多くの職場、多くの教室、そこでセクハラする加害者がいるところは、まさにDV家庭と同じように強制収容所になっている。

「安全保障」というと、もっぱら国際関係の問題だと思いがちですが、DVとセクハラを思い出すと、女性と子どもにとって一番危ないのは、身近な男性だと気付きます。決して外国の軍隊ではない。いまも言ったように、3日に1人、妻が夫に殺されています。1週間に1人、子どもが親に殺されています。子どもが変質者に襲われて、誘拐されて殺される確率は、どれぐらいあるのでしょうか。極めて低いです。そういう事件があったとしても、年数件でしょう。そういうことがあると、「わあ、たいへんだ」と大騒ぎするのだけれども、でも1週間に1人、親に子どもが殺されているのに、何で「わあ、たいへんだ」とは思わないのか。それほどまでに私たちは暴力によってマインドコントロールされているのです。しかも暴力だということさえ気が付かない。しつけが行き過ぎて殺してしまった。冗談じゃない。それは暴力殺人です。

もちろん男が全員暴力をふるうわけではないですね。ハッピーな幸せな家庭もたくさんある。だからこそ家庭は温かいところだという幻想が広まるので、それはそれなりに根拠があるのだけれども、だけど暴力を選ぶ男たちは多いし、しかも相手が命の危険を感じるほどの暴力を選ぶ人が200

万人もいるわけです。

200万人の人が命の危険を感じるというのはすごいことですよ。このごろ格差社会という言葉がはやりだけれども、家庭と家庭を比べると、平和格差があるのです。たしかに多くの家庭は平和で温かくて、仲よし親子で、仲よし夫婦で、いま特に仲よしパパみたいな人が多いですよ。家庭が好きでしょう、このごろの子どもって。私も不思議に思うのだけれども、このごろ温泉とか観光地とかホテルへ行くと、親子連れをいっぱい見るのです。しかも一緒に来ている子どもが大きいのです。高校生とか大学生みたいな。私なんかは古い人間だから、中学生になったら親と一緒になんて歩きたくなかったし、高校時代に親と一緒に旅行なんて気持ち悪くて、ちょっと考えられなかったけれども。まして大学生なんかになって。このごろは何か親と一緒にいるのが好きなのね。よくみんな親子仲良く、楽しく旅行しているなどと思って。でも考えてみれば、自分と子どもの関係も似たようなものなんですけれども。

そういう平和な家庭がいっぱいある一方で、ものすごく悲惨な家庭が200万世帯あるわけです。この平和格差は大きい。イラクと日本ぐらいの格差が、日本のなかにあるのです。DV家庭と非DV家庭の区別がそうですし、それからセクハラのある職場とセクハラのない職場。幸い、いい関係の職場で働いている、平和な環境で働ける人たちもいるけれども、まさに毎日恐怖を感じるような、いつ地雷が爆発するか分からないような環境で仕事をしたり、学校に通ったりしている人たちもいる。この格差がものすごく大きい。安全と安心の不平等がものすごく大きいというのが、いまの現実だと思います。

その原因をつくりだしているのは、残念ながら、男たちの暴力です。もちろん私は男が全員暴力をふるうと言っているわけではなくて、暴力をふるう男がいるということだけを言っているだけで、それは悪いことだというだけなのですが。けれども、犯罪者は圧倒的多数が男ですよ。加害者になるのはほとんどいつも男です。

問題は、では暴力を選ばない男たちは無罪なのかということです。実は、無罪ではない。というか責任の一端を担っていると私は思います。という

のは、まず暴力のおこぼれにあずかっている。女の人が怖がってくれる、女の人が言うことを聞いてくれるのは、そういう暴力男がいるからなのです。あるいは、暴力をふるわない男をありがたがってくれるというのも、暴力男がいるからなのです。

そうすると、暴力を選ばない男も、他の男の暴力から利益を得ています。さらに、本来悪いことであり犯罪行為であるのに、暴力をふるう教師や、暴力をふるう上司や、暴力をふるう夫たちを野放しているということは、暴力を選ばせない、罪を犯させないという社会全体の責任を果たしていないということです。暴力男を捕まえない警察官というのも男が多いです。だから、その暴力を選ばせない責任を果たしていない。

さらに、仲間の犯した罪のあとしまつをしていない。つまり、被害を受けた女性とか、被害を受けた子どもたちの救済というのが、ほとんどまったくおこなわれていない。学校に変質者が進入してくると、「たいへんだ」と大騒ぎするのに、自分のところの近所で毎晩叫び声とか怒鳴り声とか、どたんばたんが聞こえているのに通報しない。そこで子どもが殺されてしまうまで見てしまっていて、「いやあ、実はね」と。まわりの人はみんな知っていますよね。でも、その家の子どものもので、その家のことだから関係ないといって無視しているし、虐待児童を保護する施設も足りないし、代わりに里親になってくれる人もいないしということで、ごく一部の男が暴力を選んでいるわけですが、言ってみれば暴力を選ばない男にも連帯責任があるんじゃないかなと思うのです。

5 男の非暴力は可能か？

その連帯責任を感じつつ、では男たちのなかの暴力男をなくす、男を非暴力化するということが可能なのだろうかというふうなことを、このごろ考えています。まず、そのためには意識を変えろとか、暴力をふるう男を変えろということも、できればいいのだけれども、さっきも言ったように、それは非常に難しいのね、もうすでにそうなった人は。若い子は別だけれどもね。

でも、暴力を選びにくい環境をつくれればいいのです。そのためには、やはりDVやセクハラ加害者は犯罪者としてきちんと逮捕して、起訴して、有罪にして、処罰するということが絶対条件だと思います。夫だ、上司だ、先生だと思うからいけないので、そういうのを取っ払って考えれば、ただの暴力犯罪者ですよ。例えば飲酒運転は捕まってしまうし、飲酒運転で人身事故なんかを起こしたら、だいたい懲戒解雇されてしまいます。特に公務員なんかはね。ところが、同じように誰かを深く傷つけているというようなDVとかセクハラがあっても、その加害者は懲戒解雇もされないというのはおかしいでしょう。犯罪者として処罰もされない。処罰することが社会に対して、社会全体としてこれは許さないのだというメッセージになるのです。それは、いまおこなわれていない。だから、そうするようにしなければいけないということです。

もうひとつ必要なのは、被害者の援助とエンパワーメントです。DVの被害者については、シェルターづくりとかがはじまっていますが、児童虐待の被害者の救出はまだまだ足りないし、子どもたちのためのシェルターもたぶん必要で、東京にカリヨン（東京弁護士会編『お芝居から生まれた子どもシェルター』明石書店、2006年）というのができましたけれども、まだまだ足りない。

暴力を選ばせない環境づくりとともに、もうひとつ大切なことは、暴力を選ばない男を育てることです。いまの若い男の子たちに対する非暴力教育。まず、家庭で絶対に体罰をなくすべきだと私は思っています。これは、母親も含めて親は絶対子どもを叩かない、怒鳴らない、おどかさない。

さらに学校では、このごろ少しCAPとかセイフティーンとかが始まっていますけれども、学校での非暴力教育というのも大事だと思います。もちろん教師の体罰なんていうのは絶対いけない。

それと、できれば、このごろなんかは、それこそ子どもも少なくなっているのだから、チームティーチングとかをやるときに、男の先生と女の先生が、どっちかがどっちかをリードするとか、どっちかがどっちかの言うことを聞くのではなくて、ほんとうに対等に仲良く、決して暴力を使わずに仕事をしている姿というのを子どもたちに見せられたら、私はすごくい

い効果があると思う。そうしたら、ああ、うちの親は父ちゃん母ちゃんひどいけど、こういう関係もできるんだということの見本になりますからね。なのに『金八先生』のテレビを見ていると、養護の先生がお茶入れをしているのです。あれではだめです。

それから、家庭とか学校、地域、そういう身近なところから非暴力・平和運動と連携していきたい。みなさん、いま国連で「非暴力と平和の文化のための国際10年」というのをやっているのをご存知ですか。ぜひ知ってください。ユネスコのホームページに行くに出ています。2000年、ちょうど20世紀最後の年を「非暴力と平和の文化のための国際年」と決めて、ユネスコ中心に活動をはじめて、2001年からの21世紀の最初の10年を、特に若い人のための非暴力と平和の文化をつくる10年にしようという運動です。ところが、始まった途端に、2001年の9.11の「同時多発テロ」のあとに、それがなんと暴力と戦争の10年になってしまっているのですが。

家庭の男女平等とか、家庭とか職場での男の非暴力の問題と、国際平和の問題とはつながっています。これは中里見博さんという憲法学をやっている若い先生が書いているブックレットがあるので、ぜひ読んでみてください（中里見博『憲法24条+9条 — なぜ男女平等がねらわれるのか』かがわ出版、2005年）。

DVの問題を男の人にも理解してもらうために、たぶん男だって戦争はいけないと言う人はいまは多いと思いますから、憲法9条を家族にも適用すべきだと思うのです。お手元の資料に書いてあるので、あとでもう一度ご覧いただければいいですけれども。憲法9条、この条文はみなさんご存じだと思いますが、ちょっと変えるだけでこうなります。

「日本国民は」というのを「男は」に変えるのです。「秩序」というのは、ちょっと問題があるので、私は「ケア」と変えたいのですけれども、「国際」というところを「家庭」。ちょこちょこ直すと家族のための憲法9条になります。

我々男性は、正義とケアを基調とする家庭平和を誠実に希求し、夫権の発動たるDVと、暴力による威嚇又は暴力の行使は、家庭紛争を

解決する手段としては、永久にこれを放棄する。

前項の目的を達するため、身体的、精神的、経済的その他の支配力は、これを保持しない。男性の好戦権は、これを認めない。

「交戦権」は戦争をする権利ですけれども、それをちょっと「好」というふうに変えましたけれども、戦いを好む権利です。ただし、これを英語にすると、どちらも同じ言葉 (the right of belligerency) なのです。

はい、職場にもつくりましょう。

男性上司は、正義とケアを基調とする職場平和を誠実に希求し、男権の発動たるセクハラと、性的な言動による威嚇又は性暴力の行使は、女性部下を支配する手段としては、永久にこれを放棄する。

前項の目的を達するため、身体的、精神的、経済的その他の支配力は、これを上司に付与しない。男性上司の好色権は、これを認めない。

みなさんで、学校のための憲法9条とか、地域のための憲法9条とかをつくってみてください。

国連の「非暴力と平和の文化のための国際10年」で、ノーベル平和賞受賞者たちが起草した「わたしの平和宣言」というのが出ています。6つポイントがあるのですが、

1つ目は、すべての命を尊重すること。

2つ目は、あらゆる暴力を拒否する。重要なことは、単にさまざまな暴力を、とりわけ子どものような弱者に対してふるわないというだけではなくて、暴力を許さないための積極的な非暴力活動をやっていくということなのです。暴力に非暴力で対抗する。これは実は非常に難しいです。暴力は暴力でしか防げないのではないかと私たちは思われています。他国のミサイルの心配をするよりも、妻を殺す夫とか子どもを殺す親の心配をしたほうが、もっと安全保障ができるのです。そのところの発想を転換しないといけないのです。

3つ目のポイントは、誰とでも分かちあうということ。これは誰かが何

かを独占するということは許さないということです。

一番大事なことは、4つ目、理解しようと耳を傾ける。聞く耳を持たないというのがDV夫だし、セクハラ男だから、そうではなくて、女性と子どもに対して聞く耳を持つということが大事なのです。

5つ目の地球環境を守るというのは、何で平和につながるんだと思うかもしれないけれども、これは資源の奪い合いをしないということです。

最後に、連帯を取り戻す。その連帯をするときに、特に女性の完全参加と民主主義の原則ということが強調されています。

こういったことに対して、すべて反対のことをしているのが、マクロに見ればブッシュ政権であり小泉政権であり、それからミクロに見ればDV夫だし、セクハラ男だしということになるのではないのでしょうか。

ちょうど3時ですね。以上で私が一方的にお話しするのは、ここで終わりにしたいと思います。あと、これから残りの時間でご質問とかにはお答えしたいと思いますし、もし何かありましたら電子メールをいただければ、お返事は必ず差し上げますので、どうぞ遠慮なくメールをしてください（アドレス：numazaki@sal.tohoku.ac.jp）。では、どうもありがとうございました。